

一心寺かわら版

第四十四号 平成三十年九月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

大相撲から「女人禁制」を考える



京都府舞鶴市で行われた春巡業の土俵上で市長が倒れ、とっさに救命措置をした女性に対して、行司が「土俵から下りてください」と場内アナウンスを繰り返したことに多くの批判が集まりました。協会がこの対応を「不適切だった」と謝罪したのは当然ですが、話はそれでは終わらずに、土俵の女人禁制を今後も守るべきかどうか、にまで波及しました。

土俵の女人禁制が最初に大きく報じられたのは一九七八年のわんぱく相撲。東京都荒川区で女子小学生が準優勝したのですが、規約により決勝大

会に進むことができませんでした。「女性不浄視が理由なのか」との問いに日本相撲協会側は「土俵は練磨の場であり、そもそも選ばれた者しか上がることはできず、女性蔑視は無関係である」と答えました。一九九〇年には森山真弓官房長官が、二〇〇〇年には太田房江大阪府知事が表彰で土俵に上がろうとしましたが、断念せざるを得ませんでした。二〇一一年の千代大海の断髪式でも、母親が土俵上ではさみを入れることは叶いませんでした。

協会側は女人禁制の議論に際して「相撲は神事が起源」「大相撲の伝統文化を守りたい」「大相撲の土俵は男が上がる神聖な戦いの場、鍛錬の場」の三つを理由に挙げてきました。その中で「神事という言葉は神道を思い起こさせ、「女性を不浄とみていた神道の昔の考え方が根拠」と語られるが、これは誤解。大相撲の神事は農作物の豊作を願う感謝するといった素朴な庶民信仰で習俗に近い。これまでも女性差別を一貫して否定してきた」と説明。また、今回強く打ち出したのが「土俵は神聖な戦い、鍛錬の場」との考え。「土俵は男が必死で戦う場であるという約束事は力士たちにとっては当たり前のこと。結果として女性が土俵に上がることはないという習わしが受け継がれてきたと思う」と説明されました。

そもそも相撲において、女性はどのような存在だったのでしょうか。文献上、初めて相撲が登場した『日本書紀』には、女性が相撲を取ったと記録されています。ただ、天皇が女官にふんどし姿で相撲を取らせたという内容であったためか、公式には相撲の起源とはされません。六四二年に朝廷が開催した健児（こんでい・兵士）相撲が起源とされます。また十六世紀の書物には、勧進相撲（営利目的の興行相撲）に比丘尼（びくに・尼僧）が登場していたことが記されています。明治初期までは男女の相撲が見せ物として行われ、女相撲は戦前まで全国巡業もあったといわれています。東北や九州では今なお祭事として残っている場所もあるそうです。

一七八一年以降、両国回向院で勧進相撲が開催され、これが現在の大相撲につながります。江戸時代には女性の観戦は千秋楽のみ、明治に入り一八七二年から次第に解禁されました。一九〇九年に国技館完成。国技を行う場所だから国技館と命名されたのではなく、国技館で開催されることで国技として認知されていきました。

こうして、相撲の起源は宮中行事の相撲節会とされ、大相撲は一四〇〇年の歴史を持つことになりました。宮中行事を起源とする由緒正しい国技は特別なものとする根拠として、神道とのつながりが強調され、女人禁制はそのために後付けされたのではないかと指摘されています。

ちなみに、一八九六年にアテネで開かれた第一回近代オリンピックも女人禁制で行われており、国技館の土俵を男だけのものとしたのも、当時としては無理もないことだったのかも知れません。

大相撲界で土俵は、神聖なまつりごとの場とされます。本場所初日の前日や部屋開きの際、「土俵祭り」が執り行われます。祭主である立行司が、相撲の由来を述べる口上で次のように唱えます。

「清く潔きところに、清浄の土を盛り、俵をもって形となすは、五穀成就のまつりごとなり」。五穀豊穡のまつりごとならば男女を区別する必要は感じません。調べてみると、神事が起源でもなく、女人禁制が伝統とも思われません。土俵は戦いの場ということは理解できても、女性が土俵に上がれないという考えは成り立たないように思います。

さて、女人禁制は大相撲に限りません。特に宗教と深く関わっており、かつて日本の多くの山は女人禁制とされました。山の神は女神であり、女性が入山すると嫉妬して山が荒れるといった言い伝えが各地に見られます。また、古代の日本では巨大な山は魑魅魍魎（ちみもうりょう）が住む危険な場所と信じられ、子供を産む女性は安全のために山に近づいてはならないとも言われていました。次第に、女性が近づかない山奥こそ異性に煩わされず厳しい修行が可能であるとして、霊山と呼ばれる山には女人禁制が定着したと言われています。近代以降、解除されていった女人禁制。真言宗

高野山では解除が始まった一八七八年、空前の参拝者数を記録。一九〇六年開山以来一〇〇年を経て、女人禁制が全廃されました。世の風潮と合わなくなったからとされませんが、観光化が影響したとも言えるでしょう。ただ、奈良県の大峰山（下写真）など、今なお女人禁制が現存しているところもあります。

お釈迦さまも当初、女性が出家することに否定的でした。その主な理由は、元々の男性出家者が修行に専念できなくなるということのようです。しかし、養母の願いを受け入れて、女性の出家をお認めになりました。そのため女性特有の様々な（規則）を設けていきます。多くの女性がさとられたことが経典に記録されているように、仏教は女性にも平等に開かれた教えであると言えるでしょう。しかし、お釈迦さまの考えに反して、次第に、五障（女性は生まれながらにして梵天王、帝釈天王、魔王、転輪王、仏になれない障りがある）三従（女性は幼い時は親に、結婚すれば夫に、老いては子に従わなければならない）という考えが仏教に入ってきたのも事実です。

浄土真宗では、当初から女性が僧侶となることはもちろん、住職になることも早くから認められています。真宗興正派の第九代は女性、了明尼公（一二九四〜一三七六）でした。



「『女人禁制』が穢れ意識と深い関係があり、宗教が絡む事によってなくなりにくいのだ。しかも、女性差別であるのに女性が内面化しているため、変えることに難しさがある。また、許されている背景には、女性差別や宗教への無関心の問題がある」という指摘は的を射ているといえるでしょう。

男女には明らかに違いがあります。それぞれ得意不得意がありません。しかし、それが差別につながってははいけませんし、それを宗教が助長するようなことがあってはなりません。男女という性別にとらわれることなく、人間一人ひとりが尊重されなければなりません。男女平等、当たり前前のことであり、大切なことです。

はじめまして仏教 報告

初回、第二回「お釈迦さまってどんな人？」では、いつどこで生まれたの？何人だったの？ということから、誕生時の伝説「天上天下唯我独尊」について。出家するきっかけとなったのは老病死への悩み。これは時代や国が変わろうと普遍的なもの、私たちにとっても切実な苦しみでしょう。さとり道を目指し、安らかな境地に到達されて四十五年にわたって教えを説かれたお釈迦さま、その生涯についてお話しました。

第三回「仏像を観てみよう」では、一心寺の仏像三体と百枚の国宝仏像の写真をしながら、それぞれの仏さまの姿形があらわしていることを説明。



ただ見るだけでなく、そのところに触れることが大切です。

そして「お釈迦さまの教えって？」。諸行無常（しよぎようむじよう）、諸法無我（しよほうむが）、一切皆苦（いっさいかいく）、涅槃寂静（ねはんじやくじよう）という仏教の根本を中心にお話。仏教はものごとを正しく見ることで苦しみを乗り越え、喜びを見出す教え。だからこそ、永く今に伝わっているのでしょう。

次回は十月七日（日）十四時〜「お釈迦さまから親鸞聖人へ」。

春季永代経 報告

汗ばむ陽気の春季永代経。法話は川田信五師（大信寺）。

仏教は智慧のある生活によって空しく過ぎることの無い人生を教える。兄弟宗教であるキリスト教とイスラム教は争いが絶えない。なぜなら、私が正義であるとして他を邪教として打ち倒そうとする。仏教は、私が正しい、他が間違っているという誰も持っていない心を邪見として退ける。相手の立場に立つ、争いを治めることができる。空しくない人生とは元気に朗らかに笑って生きること。昔の人は厳しい時代でも笑って生き抜いた。衣食住に困らない現代の私たちが、それができないでは申し訳ない。笑って生きる姿を見ることが子や孫への一番大切な贈り物である、とお話されました。

よるしるべ二〇一八春 報告

灯りに導かれながら映像作品などを通して観音寺の歴史、風景、文化に触れる夜のまち歩き「よるしるべ」。今回も観音寺の街を美しく彩ってくれました。



声明雅楽コンサート「よるしらべ」のメインは、御懺法講（おせんぼうこう・天皇皇后及び皇族方の年忌法要）でも用いられる礼拝部分「十二礼」。三鼓（鞆鼓・太鼓・鉦鼓）に合わせたリズミカルな声明が、和蠟燭の炎に照らされ光り輝く本堂に響き渡りました。

「よるしらべ二〇一八秋」は十一月二〜四日に開催決定。「よるしらべ」は三日十九時より開催予定。是非ご来場ください。

おてらくご・お寺十仏教報告

今年には笑福亭松枝師匠。「餅屋問答」。餅屋の親父が和尚に扮して、訪ねてくる雲水と問答。餅屋の奇妙なジェスチャーが、高僧と信じ切っている雲水には禅問答に見える。餅屋は、雲水のジェスチャーが自分の餅をけなしているように見える。その行き違いが面白さを生み出します。

仏教はものの見方を教えてくれます。傍から見ればジェスチャー・事実の一つ。しかし、見方によって意味は変わってきます。

人生には終わりがあある、その事実をどう受け取るか。一日一日死に向かっていていると思うか、一日一日いのちをいただいていると思



うか。死んだら終わりか、いのちを終えて浄土に往生して仏になると思うかで、人生の方向、意味は違ってくるのではないのでしょうか。あるお医者さんが不治の病の方におっしゃったそうです。「あなたの寿命を長くすることはできません。その間に良く生きられるようにします。くよくよせず愉快に行きましょう」。

真宗門徒は、いのちの行き先は阿弥陀さまにまかせる。そして精一杯生きるということを考えてきたのではないのでしょうか。

明石家さんまさんの「生きてるだけで丸儲け」。これはある意味さとの言葉でしょう。丸儲けだから何をしてもよいのではなく、丸儲けだから感謝しかない。毎日、阿弥陀、はかりしれないのちをいただいで生きている、浄土へ生まれ仏とならせていただく。おかげさまと感謝して日々を過ごす。それが南無阿弥陀仏では。

最後はもう一席「相撲場風景」。師匠の名人芸を楽しみつつ、お寺、仏教に触れていただきました。

古澤巖一心寺奉納公演報告



三月放送のTBS『びったんカン★カン』に葉加瀬太郎さん、高嶋ちさ子さんと一緒に出演され、神のヴァイオリンと称される演奏はもちろん、その面白さにも一躍注目が集まった古澤巖さん。今回は山口百恵さんの「いい日旅立ち」、TOKYO FM『JET STREAM』のテーマ「Mr. Lonely」、無伴奏「バガニーニアナ」など、二〇〇人を超える来場者に素晴らしい音色を届けてくださいました。